

「国語表現」の年間指導計画の研究

— 評価規準に着目して —

松本久美¹

教科、科目の目標を効果的に実現するために、評価規準に重点を置いた年間指導計画の在り方について研究を行った。どの時点で、どのような評価を行うかという視点を持ち、年間を見通して評価規準を適切に配置することは、授業改善の基盤でもある。そこで、本研究では選択科目「国語表現」を例として取り上げ、具体的な年間指導計画を作成することを通して、その方法、手順、留意点を整理した。

はじめに

授業改善の大きな要素の一つとして、どの時点でどのような評価を行うかという視点を持ち、年間を見通して評価規準を適切に配置するということがある。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）」（国立教育政策研究所 2012 以下「評価規準の参考資料」）にも示されているように、目標に準拠した学習評価を行うことには「全ての生徒に確かな学力を身に付けさせる」「生徒の学習意欲を向上させる」「生徒の様々な進路希望の実現につながる」「高等学校卒業の質的保証がされる」などの効果がある。一方で、そのためには、「評価方法の工夫」と「評価時期の工夫」が必要となる。評価方法の工夫については、授業づくりという視点で、これまで様々な研究がなされてきた。しかし、時期の工夫についての研究は、まだ少ないように思う。そこで今回、目標に準拠した学習評価の確実な定着を目指した、よりよい年間指導計画について研究することとした。

年間指導計画作成の重要性は誰もが感じていることではある。しかし実際には十分に検討がなされず、教科書の教材配列を中心とした年間指導計画で新年度がスタートしてしまうこともある。特に選択科目「国語表現Ⅰ・Ⅱ」は、これまでの筆者の授業実践から、年間指導計画という観点では、最も課題が多いと感じている科目である。例えば、自主教材を多く使用しているために、担当者によって指導内容の差が大きくなってしまったり、「書くこと」の指導が優先され「話すこと・聞くこと」の指導が十分にされていないことなどの課題が挙げられる。これは、年間を見通した上で目標の実現に向けて段階的に指導していくことができていなかった結果と考える。

そこで本研究では高等学校学習指導要領（文部科学省 2010 以下、学習指導要領）で新たに設けられた選

択科目「国語表現」の具体的な年間指導計画を作成することを通し、国語科全科目における評価規準に重点を置いた年間指導計画作成の手法、手順、留意点を整理することとした。

研究の内容

1 「国語表現」年間指導計画の現状における課題

今年度、県教育委員会に提出された県立高等学校 143校の年間指導計画のうち「国語表現Ⅰ」「国語表現Ⅱ」に関わる部分を分析した結果、次のような課題が見られた。

学習指導要領では、国語科の各科目は「目標」「内容」「内容の取り扱い」で構成され、さらに「内容」の中に「指導事項」がある。まず「目標」について、本来であれば学習指導要領の「目標」を基にして、学校の状況に応じて自校の「目標」が設定されるべきであるが、そのような例はあまり見られなかった。さらに目標は「指導事項」を繰り返し指導することで実現されるため、どの学校においても、全ての指導事項を必ず指導しなくてはならない。しかし、提出された年間指導計画の中には、この指導事項について全く触れていなかったり、一部の指導事項しか入っていないというものがあつた。

また、国語科の評価の観点は「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の五つであるが、科目によって取り上げる評価の観点が異なる。例えば「国語表現」は「読む能力」を除く4観点で評価する。しかし、実際には「国語表現」であるにもかかわらず「読む能力」を観点に入れている学校が複数見られた。

また、科目の観点の主旨は示されているものの、単元ごとの評価規準が示されていないため、どのように生徒に力を付けていくのかというプロセスが見えないものや、教科書の教材配列そのものをもって年間指導計画としているものが大部分であつた。

以上のように、現段階では「指導事項」や「評価規準」に着目した年間指導計画はあまり作成されていな

1 神奈川県立大楠高等学校
研究分野（授業改善推進研究 国語）

いと言える。

今回、分析を行ったのは「国語表現Ⅰ・Ⅱ」であるが、国語科の他の科目においても同様の課題が見られる。

2 「国語表現」年間指導計画の作成手順と留意点

年間指導計画を工夫するということは、単に教材の並べ方を工夫することではなく、科目の目標を実現するために、それぞれの単元の評価に係る最適の時期や方法を整理し、どの時点で、どのように評価を行うかを明確に示すことである。このような年間指導計画が各校で作成されることが、目標に準拠した学習評価の確実な定着を支え、それが、ひいては授業改善にもつながると考える。

このような観点から年間指導計画を作成するためには、その作成手順を整理する必要があると考えたが、年間指導計画の具体的な作成手順についてはあまり資料がない。そこで、既に「評価規準の参考資料」等様々な文献に示されている単元の評価の進め方や手順を参考に、それらの要素を組み合わせながら年間指導計画の作成手順を考えた。

- | | |
|-----|------------------------------|
| 手順1 | 「科目の目標」の設定 |
| 手順2 | 「内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項」の作成 |
| 手順3 | 「評価規準に盛り込むべき事項」の配列 |
| 手順4 | 「単元の評価規準」の設定 |
| 手順5 | 「学習活動」の設定 |

この手順に従い、具体的な「国語表現」の年間指導計画を作成し、細かな留意点を整理した。以下、その手順ごとに留意点を述べる。

(1) 手順1 「科目の目標」の設定

自校の「科目の目標」を設定する際に、まず学習指導要領を確認することは言うまでもないが、加えて自校の教育目標を踏まえることも不可欠である。教育目標は、各校が求める生徒像や、育みたい生徒像から設定されたものであり、教科の目標、科目の目標は、それを実現するためのものでなくてはならない。それには、日々の授業実践や授業見学、校内授業研究を通して生徒の実態を適切に把握した上で、生徒の状況分析をすることが欠かせない。その上で掲げた目標に対して生徒が今どの段階にあるのかについて、研究協議や教科の打合せにおいて担当教員間での共通理解を図ることが重要である。このように、学習指導要領の科目の目標、学校の教育目標、生徒の状況分析に基づく身に付けさせたい力等を総合して各校の「科目の目標」を設定する。

【科目の目標の作成例】

「国語表現」の目標（学習指導要領）

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

↓ **学校の教育目標や生徒の実態を加味する**

<科目の目標例>（後述3 年間指導計画例ⅠⅡより）

例Ⅰ 国語で適切かつ効果的に表現するために、語彙を豊富にし、漢字を読み書きする力を身に付け、話をしっかりと受け止めて文章で表現できる力を育成するとともに、あらゆる事象に課題意識をもち質問できる力の育成を図る。

例Ⅱ 国語で適切かつ効果的に表現するために、情報を分析して活用する力を身に付け、進んで表現することによって、社会的な事象に関心をもち、その課題を解決するのに役立つ力を育成する。

(2) 手順2 「内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項」の作成

国語科では言語活動を通して、「指導事項」を学習するとされている。この「指導事項」は1回限りのものではなく、1年間の中で、分割したり繰り返したりして何回も指導することで目標を実現するものである。この「指導事項」には複数の要素が含まれているので、もれなく効率的に指導するためには、その要素を整理する必要がある。このように「指導事項」の要素を整理したものが「内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項」（以下、「評価規準に盛り込むべき事項」）である。これは、全ての学校で必ず指導しなくてはならないものなので、年間指導計画を作成するためには、まず第一に、この「評価規準に盛り込むべき事項」を作成することが不可欠である。「評価規準の参考資料」には、必履修科目の「国語総合」の例は明記されているが、選択科目については示されていない。そこで、この「国語総合」の例を参考に「評価規準に盛り込むべき事項」の作成方法を検討した。

「国語総合」については学習指導要領の「内容」が「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に分かれ、それぞれに指導事項が示されているが、選択科目については領域等に分けた形で示されていない。国語科の評価の観点は、この領域等に基づいているので「評価規準に盛り込むべき事項」を作成するためには、まず各指導事項の要素が、どの領域等にあたるのか、どの観点で評価すべきなのかを明らかにしなくてはならない。科目によっては、一つの指導事項が複数の観点にわたる場合もある。これについては「評価規準の参考資料」に「選択科目の評価の観点と指導事項との対応」の表があるので、それに拠ること

ができる。次の例は、一つの指導事項の前段と後段で別の観点になっているものの例である。

【前段と後段で観点が異なる例】
「現代文A」指導事項イ（学習指導要領）
文章特有の表現を味わったり、語句の用いられ方について理解を深めたりすること。

↓ **観点で分ける**

<評価規準に盛り込むべき事項例>
○文章特有の表現を味わう。（読む）
○語句の用いられ方について理解を深める。（知識・理解）

次に、指導事項の要素を観点ごとにさらに細分化し整理していく。指導事項の文章は、要素の並び方にくつかのパターンがある。そこで、ここでは、指導事項の要素を整理する方法を「並列のパターン」と、「発展のパターン」の二つに分けて考えてみた。

ア 並列のパターン

指導事項の文章が「まとめたり深めたり」というように「～したり～したり」という場合である。この場合には、次の例のように「～自分の考えをまとめる」という要素と「～自分の考えを深める」という要素に分けることができる。

【並列のパターン作成例】
「国語表現」指導事項 ア（学習指導要領）
話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。

↓ **内容で分ける**

<評価規準に盛り込むべき事項例>
○話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめる。（話す・聞く）（書く）
○話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えを深める。（話す・聞く）（書く）

イ 発展のパターン

指導事項は必ずしも1回で行わなければならないものではない。生徒の実態に応じて、段階的に進めるために、分けて行うこともできる。最終的には指導事項の一文全ての要素を指導するとしても、発展のパターンによって要素を段階的に整理しておく、一度で指導することが難しい場合に活用しやすい。

次の例は、話し合うことに関する指導事項で、最終的には「課題を解決するため」の話し合いができることを目指している。相手を尊重して話し合うことについては、「国語総合」で既に指導しているところではあるが、「課題を解決する」ためには、相手だけではなく「異なる考え」そのものを調整し、合意を形成することが求められる。生徒の実態から、これらを一度に指導することが難しい場合は、段階を踏んで指導できるようにあらかじめ要素を分けておくとよい。

【発展のパターン作成例】
「国語表現」指導事項イ（学習指導要領）
相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。

↓ **段階を付ける**

<評価規準に盛り込むべき事項例>
○相手の立場や異なる考えを尊重して、話し合う。（話す・聞く）
○相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合う。（話す・聞く）

(3) 手順3「評価規準に盛り込むべき事項」の配列

手順1で設定した「科目の目標」の実現のために、手順2で作成した「評価規準に盛り込むべき事項」を、どのような順序で扱うべきか、その配列を検討する。配列は科目の目標を実現するための様々なステップやプロセスを整理し、それを各校の生徒の実態に応じて組み合わせて決定する。

科目の目標を実現するためのステップやプロセスとはどのようなものか「国語表現」を例に考えた。まず、「話すこと・聞くこと」「書くこと」という領域ごとにステップを設定する。一般的に、話す場合も書く場合も身近なテーマや具体的なテーマについて行う方が取り組みやすく、社会的なテーマや抽象的なテーマになるに従って難しくなると考えられる。そのようなステップの考え方は、高等学校学習指導要領解説国語編（文部科学省 2010 以下、学習指導要領解説）の付録「小学校、中学校、『国語総合』の目標及び内容の系統表」からも、読み取ることができる。そこで、この系統表の内容を参考に、例として領域ごとの能力育成のプロセスを具体的な活動の形で10段階に分けて設定した。

【「話すこと・聞くこと」の能力育成プロセスの活動例】

- ①書かれたものを読む、聞く
- ②自分で書いたものを読む、聞く
- ③事実を伝える、聞く
- ④事実を説明する、聞く
- ⑤自分の考えをまとめて話す、聞く
- ⑥他者と意見を交わす
- ⑦他者と意見を交わして自分の考えを広げ深める
- ⑧数名で意見を交流し結論を出す
- ⑨具体的な課題、身近な課題の解決のために話し合う
- ⑩抽象的な課題、複雑な課題の解決のために話し合う

このプロセスは一例である。生徒の実態により、必ずしも①から全てを行う必要はなく、④や⑤の途中段階からスタートすることや、さらに高度な段階を設定することも可能である。学校や生徒の実態に応じて領域ごとの能力育成のプロセスを検討し、それに沿って領域ごとの配列を決定する。

次に、各領域のプロセスを組み合わせる。「話すこと・聞くこと」と「書くこと」はそれぞれ別に行うのではなく、関連させて行うことで、より効果的に能力が育成されるのではなかろうか。例えば「書くこと」については、書いて終わりにするのではなく、書いたものを他者に批評してもらったり、そのことについての話し合いをしたりすることで、思考が広がり深まり、それがさらに「書く能力」を高めていく。また、「話すこと・聞くこと」については、話す前に「話したいことを書いて整理する」、聞いた内容を「簡単なメモにまとめる」など、音声言語を文字化することで「話すこと・聞くこと」を客観的に捉えることが可能となり、それが「話す・聞く能力」を高めることにつながる。このように二つの領域の能力は関連性を持ち、螺旋状に成長していくと考えられる。そこで、領域ごとに配列したものを、その関連性や生徒の実態に応じて組み合わせ、科目全体の「評価規準に盛り込むべき事項」の配列を決定する。

この配列が、単元の配列になるわけだが、単元ごとの活動だけでは、能力の育成において十分でない部分が出てくる。それについては、帯単元を活用することで補うことができる。例えば、短時間で繰り返し行う方が有効な学習活動（漢字・語句の小テスト等）が取り入れやすくなる。また、予備知識が必要な単元を実施するには、帯単元で積み重ねた知識を単元の中でいかすことが可能になる。また、直接には配列と関係ないが、例えば、毎授業初めの10分間で小テストを行うことで授業の流れに変化が付き、集中させやすくなるといった利点も帯単元にはある。

(4) 手順4 「単元の評価規準」の設定

手順3で配列した「評価規準に盛り込むべき事項」を基に「単元の評価規準」を設定する。高等学校は地域や生徒の実態に即して、各校で評価規準を設定することになっている。「評価規準の参考資料」には「国語総合」の評価規準の設定例があげられているので、それを分析し、設定の方法を整理した。その際、基本となるのは学習指導要領解説の記述を組み合わせる方法である。

【評価規準の作成例】

「国語表現」指導事項ウ（学習指導要領）
主張や感動などが効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫して書くこと。

↓ 内容で分ける

＜評価規準に盛り込むべき事項例＞

A 主張などが効果的に伝わるように、論理の構成などを工夫して書く。（書く）

B 感動などが効果的に伝わるように、描写の仕方などを工夫して書く。（書く）

↓

※Bを例として取り上げる。右上の表に続く

↓

学習指導要領解説の記述の一部

感動を表現する際には、触発する契機となった人物や事件、自然などの、何が、どのような印象を与えたのか、その特徴はどうであったのかなどを的確に把握し、読み手に、実際にそれを見聞きすると同様のイメージや印象を与えるよう描写する必要がある。

↓ 記述を組み合わせる

＜評価規準例＞

感動などを効果的に伝えるために、その契機となったものについて、特徴を的確に把握し、読み手に同様のイメージや印象を与えるような描写をしている。

↓ 生徒の実態に合わせる

(例B1)

自分の感動を客観的に捉え、読み手に伝わるように工夫して書いている。

(例B2)

感動を伝えるための描写の工夫とその効果について整理分析を行い、題材や読み手に応じてそれらを使い分けて書いている。

また、評価規準を設定する上で重要なことは、生徒の実態に合わせて作成することである。したがって、同じ指導事項を扱う場合でも、生徒の実態によって評価規準は異なってくる。

(例B1)は自分の感動を読み手に伝わるように工夫して書くことを目指している。(例B2)は個別、具体の工夫だけでなく、一般的な描写の工夫と効果そのものについて理解し、それを活用することを目指している。つまり、(例B2)の方が(例B1)の評価規準よりも高いレベルを目指して設定している。

他にも「評価規準に盛り込むべき事項」から直接、学校や生徒の実態に応じて評価規準を作成することも可能である。

これらの方法を組み合わせながら「評価規準に盛り込むべき事項」ごとに評価規準例をあらかじめ複数作成しておき、その中から各単元に合わせて選んで設定していくと、漏れがなく設定もしやすい。

(5) 手順5 「学習活動」の設定

手順4で設定した「単元の評価規準」を基にして、その単元の目標を実現するための「学習活動」を設定する。教材は学習活動に応じて教科書などから選ぶ。学習活動を考える際に大切なことは、その活動が目標の実現のために効果的かどうかということである。

今回「国語表現」の学習活動を設定するにあたっては次の三つの点に配慮した。

一つ目は、思考や判断を促す場を設定することである。国語科の5観点のうち「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」には、他教科の観点で言うところの「思考・判断・表現」が含まれている。そこで「話

す・聞く」「書く」という活動であっても、単なるコミュニケーションスキルを身に付ける活動に終わらぬように、個々の生徒がじっくり考える場面を設定することが不可欠である。

二つ目は、学習形態の意義や効果を吟味することである。学習形態の在り方については、形態ありきではなく、あくまでも学習目標を実現するのに効果的であることが重要である。

三つ目は、生徒が主体的に取り組みやすい題材を用いることである。生徒の生活環境や身に付けさせておくべき力等は、学校によってかなり異なる。生徒が主体的に学習に取り組むためには、まず彼らが自らの生活と結び付けやすく、実感をもって考えられるテーマ、題材を設定することが必要であると考えた。

以上が目標に準拠した学習評価の確実な定着を目指した「年間指導計画」を作成するための手順及び留意点である。

3 「国語表現」の年間指導計画例

ここまで述べてきた作成手順と留意点を基に、所属校の年間指導計画例Ⅰと別の高等学校を想定した年間指導計画例Ⅱを作成した。

(1) 年間指導計画例Ⅰの作成にあたっての視点

ア 所属校（クリエイティブスクール）

「持っている力を必ずしも十分に発揮できなかった生徒に対して、これまで以上に学習意欲を高め」「基礎学力や社会性を身に付ける」取組みを行うことを目的につくられた。（2012「輝けきみの明日」）

イ 教育目標

- ・学習意欲を高め、社会生活を営むために必要な基礎学力を身に付けさせる。
- ・集団生活を通して社会人として必要な規範意識とコミュニケーション能力を身に付けさせる。
- ・様々な体験活動を通して自己有用感を醸成し、自らの目標をもつことができるようにする。

ウ 生徒の実態

語彙が乏しく、漢字の読み書きが不得意である。感じたことや考えたことを文章で表現することや人間関係づくりが不得手である。グループ活動や「話す・聞く」活動の経験が少ない。

エ 科目の目標

国語で適切かつ効果的に表現するために、語彙を豊富にし、漢字を読み書きする力を身に付け、話をしっかりと受け止めて文章で表現できる力を育成するとともに、あらゆる事象に課題意識をもち、質問できる力の育成を図る。

オ 配列

まず、自分自身の中で文字を使って思考を深めたり、広げたりして表現する力を身に付けさせるために、前

半で「書くこと」に関するプロセスに重点を置く。

次に、文字だけでなく音声言語による表現を目指すために、後半で「話すこと・聞くこと」に関するプロセスに重点を置く。

カ 学習活動

思考や判断を促すための配慮としては、まず一人で考える時間をできるだけ多く設ける。その上で作品を見せ合ったり、作品集をつくったりすることで、自分の考えをさらに深めたり広げたりできるようにする。

学習形態の配慮としては、人間関係の悪化を招いたり、授業の欠席につながったりすることがないように、グループ活動は後半に設定する。

生徒が主体的に取り組むための配慮としては、身近な題材を多く取り上げる。視覚教材を多く取り入れる。生徒の人間関係やプライバシーに配慮した題材設定をする。

(2) 年間指導計画例Ⅱの作成にあたっての視点

ア 想定校

多くの生徒が進学希望の全日制普通科の高等学校。

イ 教育目標

- ・豊かな自己形成と自己実現にむけた課題解決に対する意志を育成する。
- ・社会のリーダーとなる人材の育成を目指して、幅広い人間性と高い教養を身に付けさせる。
- ・平和で民主的な社会の形成者としての資質を養う。

ウ 生徒の実態

ある程度の長さの文章を書くことはできる。情報を収集することはできるが、それを分析したり整理したりして活用することは不得意である。創造力にやや欠ける。

エ 科目の目標

国語で適切かつ効果的に表現するために、情報を分析して活用する力を身に付け、進んで表現することによって、社会的な事象に関心をもち、その課題を解決するのに役立つ力を育成する。

オ 配列

「話す・聞く能力」「書く能力」はある程度あるので、さらに力を伸ばすために、書いたものを話すことで自分の考えを整理し、聞くことで考えを広げ、書くことにいかせるよう「話すこと・聞くこと」と「書くこと」をバランスよく配列する。

カ 学習活動

思考や判断を促すための配慮としては、身近な問題であっても社会的な問題であっても、事実を説明するだけでなく、必ず創造的な主張を求める学習活動となるようにする。

学習形態の配慮としては、人間関係づくりはおおむね問題ないと考え、できるだけいろいろな意見を知る機会をつくるためにグループ活動は前半から設定する。

生徒が主体的に取り組むための配慮としては、抽象

的概念的思考を求める際にも必ず自らの生活に照らして思考するところからスタートできるようにする。

(3) 年間指導計画例の運用にあたって

今回の「国語表現」年間指導計画例は1年次に学習した「国語総合」を受けて、2年次に行くことを想定して作成した。「国語表現」で身に付けた表現力が他の選択科目の学習にも効果的に働くと考えたからである。指導計画はそれぞれの科目だけを考えてつくるのではなく、教科全体の流れを見通した上でつくらなければならない。生徒の成長を見据えて、進路や目標の実現のために、どの時期にどのような指導が必要かをよく考えて国語科全体として総合的につくることが重要である。そこで、今回の「国語表現」の年間指導計画例の作成を通して整理した手法や留意点をまとめ、国語科全科目で年間指導計画を作成できるようなマニュアルを作成した。

4 まとめ

「国語表現」の年間指導計画例を実際に作成することで「指導事項」や「評価規準」に着目した年間指導計画の具体的な作成手順や留意点が整理できた。

本研究を通して、最も重要であり、かつ時間がかかると感じたことは「評価規準に盛り込むべき事項」の配列である。領域ごとの能力育成のプロセスを考えることはもちろんであるが、加えて領域相互の関連性を考えた配列が、科目の目標の実現には欠かせない。

もちろん、学習活動や教材は、「面白そうだから」ではなく「何のためにやるのか」を考えて設定することが大切であり、これまでも「単元」という単位で、「目標実現に効果的な授業」の研究はなされてきた。しかし、今回、年間指導計画の研究を行うことで、単元ごとの授業の工夫だけでなく、個々の単元をどのように配列していくかが大変重要であるということが、改めて明確になったように思う。

冒頭にも述べたが「評価方法の工夫」と「評価時期の工夫」は、目標に準拠した学習評価を行う上で、どちらも欠くことができない車の両輪である。一つひとつの授業がよい授業であっても、それが無計画に実施されるなら、効果も半減してしまうだろう。科目、そして教科という単位で、全体の流れを見通して能力の育成を考えることで、単元ごとの授業の工夫が、より一層いきてくるのではないだろうか。

5 今後の課題

年間指導計画をこのように改善し、手順等を整理して示すことで、学習指導要領の指導事項を押さえ、目標の実現に向け効率的にステップアップすることができる。また、評価の観点が適切に示され、単元ごとに評価規準が示されることによって、教員のみならず生徒にも学習の目標や、今どの段階にいるかが明確とな

る。異動してきたばかりの教員も学校に応じた指導がしやすくなるであろう。さらに、教材の配列をそのまま年間指導計画としていないので、教科書が変わっても利用できるといった効果が予想される。

しかし、本研究の対象は年間指導計画であるため、これらの効果の検証には少なくとも1年が必要になり、今回の研究では検証を行うことはできなかった。次年度以降、各学校現場で実際にこの手法に基づいて作成していただくことを期待するとともに、自分自身で計画に基づいて授業を実践し、国語科の他科目の計画を作成していくことで、これらの有効性について検証していきたい。

おわりに

今回、年間指導計画の作成に際し、普通科高校（学力向上進学重点校、キャリア教育推進校）や専門学科高校など各校の授業を見学させていただき、様々な学校の実態把握をすることができた。また、所属校において1単元4時間の研究授業を2クラスで行わせていただき、大変有益な資料を得ることができた。

本研究を進めるにあたり、多忙な中、授業参観や研究授業、研究協議に御協力いただいた学校や先生方に深く感謝申し上げます、研究の結びとしたい。

参考文献

- 神奈川県教育委員会 2012 「輝けきみの明日」
- 神奈川県教育委員会 2012 「組織的な授業改善に向けて」
- 神奈川県高校教育指導課 2012 「学習評価の手引き」
- 国立教育政策研究所 2012 『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）』 教育出版
- 文部科学省 2010 「高等学校学習指導要領」
- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説国語編』 教育出版
- 兵庫県高等学校教育研究会国語部会編 1995 『自己をひらく表現指導』 右文書院
- 富谷利光 2006 『達成感のある国語表現の授業』 教育出版
- 鳴島甫・高木展郎 2010 『高等学校学習指導要領の展開 国語科編』 明治図書
- 西辻正副 2012 『評価規準をどう生かすか』 明治書院
- 西辻正副 2012 「これからの時代に求められる能力とその育成に向けた指導」（文部科学省平成24年度高等学校各教科等教育課程研究協議会資料）